
恋人の基準値

みゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋人の基準値

【Nコード】

N8514G

【作者名】

みゆ

【あらすじ】

高校に入学して約一ヶ月。最初はマメにしていた高瀬君とのメールも、最近では随分減ってしまった。みんなからは私達が付き合ってるって思われていたけれど、私達って本当に付き合ってるの？だって私は高瀬君の気持ちを知らないし、私も高瀬君に自分の気持ちを伝えてない…。この小説は『恋の基準値』の番外編です。

恋人の基準値「前編」

「沙和、今日バイト休みでしょ？体育館付き合っつて。」

放課後、自分の席でぼーっと携帯電話を見ていた私に、廊下から入って来た明日香が声を掛けた。

「…また行くの？私お兄ちゃんから“恥ずかしいからあんまり来るな”って言われてるんだけど…」

「そんなの関係ないっつて。だって沙和のお兄ちゃんを見に行く訳じゃないんだから。ね。だから付き合っつて。」

「…うん。」

「良かった！じゃあ早く行こっつ。」

まだ躊躇っている私の手を、明日香が強引に引つ張る。その力の強さに観念して、私は携帯電話を制服のポケットにしまっつて立ち上がり、されるがままに廊下へ出た。

高校に入学して約一カ月。少しずつ学校にも慣れてきて、新しい友達も出来た。親友の明日香とはクラスは違っつてしまっつたけど、中学の時と変わらず仲良くしている。高校に入っつて私がアルバイトを始めたから、一緒にいる時間は前より少なくなっつたけど、バイトのない日はこっつして明日香に付き合い体育館に行くのが、日課の様になっつていた。

体育館に着くと、私達より先に来ていた女子が数人、バスケット部員を見てきやあきやあと騒いでいた。その人達を横目に見ながら体育館の隅に足を進め、壁に寄り掛かる。すると暫らくして練習をしていたお兄ちゃんと目が合い、慌てて私は引きつっつた笑顔を作り小さく手を振っつた。けれどお兄ちゃんは手を振り返す事もなく、嫌そう

な顔を私に向けた後すぐに練習を再開した。

あーあ…。家に帰ったら、また何か言われるんだろうな…。それを想像して、私は小さくため息を吐いた。

「やっぱり降矢先輩、超かっこいい…。」

隣で明日香がうつとりとした声を出す。私はそんな明日香に目を移し、それから更に増えてきた女子をちらつと見た。

東高のバスケット部は、以前全国大会にも出場したことがある、県内でも数本の指に入る強豪らしい。私はお兄ちゃんがバスケット部員なのに、その事を全く知らなかった。それを知ったのは、クラスの子や全く知らない先輩から“山口君の妹”として声を掛けられたから。強い部に入っているからなのか、お兄ちゃんは高校ではそれなりに有名で、そしてかなりモテている様なのだ。

でもモテているのはお兄ちゃんだけじゃない。バスケット部員の中には、まだまだモテる人がいっぱいいる。例えば明日香が一目惚れした降矢先輩。私達より一つ上の二年生なのだけれど、彼はかなりのイケメンで背も高く、バスケット部では一年生の頃からレギュラーとして活躍していたらしい。そんな彼を一目見ようと集まっている女子が、この中には何人もいるのだろう。

「ねえ沙和、お兄ちゃんに降矢先輩を紹介してくれる様にお願いで。」

「ええ?!」

唐突な明日香の頼みに、私は思わず大きな声をあげた。そんな私の声に、みんなが私を注目する。それに気付いて顔を真っ赤にして、私は

「すみません…。」

と小さく頭を下げ、下を向いた。

「ねえ、駄目?」

みんなの視線が私から離れると、明日香が再び私に尋ねた。

「降矢先輩もてるし、そうでもしないと先輩に近付けないんだもんだから…ね。」

顔の前で手を合わせて、明日香が私を見る。

「駄目じゃないけど…。でもお兄ちゃん、うんって言うか分からないよ?」

「それでもいいからお願い!沙和も瑞穂も彼氏いるのに、私だけいないなんて可哀想でしょ?」

「え……。」

明日香の言葉を聞いて、私は言い淀んで俯いた。そんな私を見て、明日香が

「何?どうしたの?」

と顔を覗き込む。

「…もしかして、高瀬君と上手くいつてないの?メールとか電話とか、ちゃんとしてる?」

「メールは…たまにしてる。でも、前より回数減ったかも…。私が送っても、余り返ってこなくて…。」

「電話は?」

その質問に答える代わりに、私は黙って首を横に振った。

「ちゃんとメールも電話もしてって、高瀬君に言いなよ。」

「でも…、部活も始まったし…。高瀬君も色々忙しいのかもしれないし…。」

「沙和はそれでいいの?寂しくないの?」

「寂しいけど…。」

「だったらそう高瀬君に言いなよ!付き合ってるんだから。」

「……付き合ってるのかなあ…。」

高瀬祥太君。

まだ恋を知らなかった中学生の私が、初めて好きになった人。こ

ここからは離れた高校に行ってしまったけれど、今も変わらず好きな人。

中学校を卒業したばかりの春休みに、私達は連絡を取り合う事と、再会の約束を交わした。また絶対に会おうと。

でも、それだけ。私達はそれだけの約束しかしていない。だから自分達がどんな関係なのか分からない。付き合っているって明日香に言われてもピンと来ない。

「…付き合おうとか、そういう話、全然してないし…。」

俯いたまま、私は小さな声で明日香に話し始めた。

「メールや電話をしようとか、また会おうとか、そういう話はしたけど、でもそれだけだし。付き合おうなんて話はしてないし…。」

「でも、二人だけでデートしたじゃん。高瀬君ってなんとも思っていない女子と二人で遊びに行くってタイプじゃないでしょ。だからきつと沙和の事好きだし、彼女だって思ってるって。」

「そう…なのかな…。」

クラスが違ったから余り多くは知らないけれど、確かに高瀬君は女の子と二人で気軽に遊びに行く様な、そんなタイプではなかった。それに二人だけで会ったあの日、高瀬君は私の手を優しく繋いでくれた。それは高瀬君にとって私が特別な人間だから…その時はそう思っていた。でも今はただ不安で、明日香が言ってくれた言葉も心からは信じられない。

…もし彼女だっと思って思ってるなら、何でメールを返してくれないんだろう。忙しいから…それは確かにあるかもしれない。けれど、もし私が本当に高瀬君にとって“特別”だったとしたら、もっとママに連絡してくれるんじゃないだろうか…。それがないって事は、やっぱり…。

「高瀬君は沙和が高瀬君を好きだっけ知ってるんでしょ？それを知ってて連絡取り合おうって言ったんだから、絶対間違いないって。」

「…言っていない。」

「え？」

「私…、高瀬君に好きって、言っていないの。」

「何で?!」

私の言葉を聞いた明日香が、大きな声を上げた。周りにいる人の視線が、再び私達に集中する。でも明日香はそんな事全く気にしないといった素振りで、私を睨む様に見つめた。

「何で言っていないの?! 一番大事な事なんだから、言わなきゃ駄目じゃん!」

「そうなんだけど…、なんとなく言いそびれちゃって…。」

「言いそびれたって…。それじゃあ本当に、付き合ってるのかどうなのか分からないじゃん。」

呆れた様に明日香がため息を吐いた。そして私から視線を逸らして何やら考え込んだ。その隣で、私は黙って俯いていた。

明日香が言った事はもつともだと思つた。どうして私は“好き”という自分の気持ちを、高瀬君に言わなかったのだろう…。拒絶されるのが怖いつて、そんな考えもあった。だったら友達でもいいからまた会いたいつて…。そんな私に高瀬君は『また会おう』と言ってくれた。その言葉に、私は勝手に浮かれていた。

…メールの返事が来ないから落ち込むなんて、そんなの間違つてる。来なくても当たり前なんだ。だって高瀬君は私の気持ちを知らないんだから。それに、高瀬君にとって私は何なのか、それすらも私は分からないんだから…。

「確かめに行こう。」

さっきまで視線を逸らしていた明日香が、私を見てそう言った。

その突然の提案に、私は反射的に顔を上げた。

「確かめにつて…?」

「高瀬君が沙和をどう思ってるのか。沙和もうすぐバイトの給料入るって言ってたでしょ? だからさ、今度の日曜日、高瀬君に会いに行こうよ。私も付き合つし、瑞穂にも連絡して。」

「で、でも…。そんな突然行ったら迷惑かも…。」

「何で迷惑なの？いつでも来ていいって高瀬君言ってたんでしょ？それに沙和がバイト始めたの、高瀬君に会いに行くお金を作る為じゃない。せつかく給料出るのに、行かないなんておかしいよ。」

「そうかもしれないけど…。」

「決まりね、次の日曜。瑞穂には私から連絡しとくから。その時は、ちゃんと高瀬君に自分の気持ち言っただよ。」

明日香はそう言うと、増えて来た女子を嫌がり、体育館の外に出た。そしてその後について来た私に振り返って

「降矢先輩の話、ちゃんとお兄ちゃんに伝えてね。」
と言った。

「私も沙和達付き合ってるって思ってたから、明日香の話聞いてびっくりしたよ。」

電話から聞こえて来る、久しぶりの瑞穂の声。

どうしてもっと早く本当の事を言わなかったんだろう…。そんな罪悪感を抱き

「ごめんね。。。」

と私が謝ると、瑞穂は

「まあ、いいけどさ。。。」

と言って、呆れた様のため息を吐いた。

「それで？今度の日曜日、高瀬君に会いに行くの？」

「うん…。明日香に“絶対行くよ”って言われたし…。瑞穂は？その日都合どう？」

「ごめん、私は…。その日はちょっと。。。」

頭がいいのに加え、好きな人がいるからという理由で私達とは違う高校に行った瑞穂は、現在その人 中村先輩が所属している陸上部のマネージャーをしている。

高校に入ってからすぐに付き合い始めた二人。私はまだその中村先輩に会った事はないけど、話を聞く分には、二人は凄く仲が良さそう。いつも一緒にいたいなんて、中学の時にはそんな面をあまり見る事はなかったけど、瑞穂もやっぱり女の子なんだな。

「あ、部活？それとも、デートだったりして。」
「からかう様に私が言う」と

「部活もあるよ……！でも……うん……その日は前から約束してて……。」
と、慌てながらも申し訳なさそうに瑞穂が答えた。

「そっか。楽しんで来てね。」

「うん……。ごめんね、一緒に行けなくて。」

「そんなのいいよ。気にしないで。」
その後私達は他愛もない事で盛り上がり、気が付けば通話時間は一時間を超えようとしていた。

「あ、そろそろ切らなくちゃ。お母さんに怒られちゃう。」

以前長電話をしてお母さんに怒られた事を思い出して私がそう言う
うと、瑞穂も

「そうだね。」

と私の言葉に同意した。

「じゃあ、また電話するね。」

「うん……。あ、沙和。」

「何？」

「頑張ってるね。沙和の素直な気持ち、ちゃんと高瀬君に伝えるんだ

よ。」

「うん……。ありがとう。」

素直な気持ち…か。

以前にも同じ様な事を言われた覚えがあった。『ちゃんと伝えなきゃ駄目だよ』って『伝えなきゃ分かってもらえないよ』って。

同じ様な言葉を色んな人から貰ってるのに、私は何でそれを実行してないんだろう…。

恐がってばかりじゃ駄目だ。今度こそ高瀬君に、自分の正直な気持ちと言わなくちゃ。そして、高瀬君が私をどう思っているのか、ちゃんと聞かなくちゃ。

日曜日まであと五日。

暫く私はカレンダーをじっと見つめて、それから電気を消してベッドに入った。

恋人の基準値「中編」

「え、高瀬君に言っていないの？」

「うん…。今日も部活があるみたいだし、何となく言えなくて…。」

日曜日。お昼前に明日香と待ち合わせをしてご飯を食べて、私達は高瀬君の学校の最寄り駅へと通じる電車に乗り込んだ。その駅まではここから電車で一時間程。ちよつとした旅行みたいだ。

こんな風に電車に乗ることなんて余りないからか、心臓が少しドキドキする。でもそれは楽しいからではなく、むしろ緊張から来ているもの。本当に行っても大丈夫だろうか…。そんな思いが頭の中をぐるぐると巡っていた。

明日香から高瀬君に会いに行こうと言われた次の日、私は彼の予定を確認する為、数日ぶりに高瀬君にメールをした。けれど返事は中々返って来なくて、漸く届いたのは昨日の朝の事だった。

ドキドキしながらメール開いて文章を見た途端、心の中を悲しみに似た気持ちが襲ってきて、私は小さくため息を吐いた。

日曜日も部活があるだろう事は、私にも予測がついていた。だからそれはどうでも良かった。“やっぱりな”としか思わなかった。

問題はメールの文章。表示されたのは“部活”という、たった二文字の言葉。それ以外は何も書かれていない、本当に短いメール。

最初にメールを貰った時から、高瀬君の文章は短かった。ほとんどが挨拶と用件位しか書かれていなかった。それでも私は嬉しかった。メールを貰える。それだけで喜びを感じていた。

昨日だって、メールを貰えたことは嬉しかった。でも返事が遅れたのにその事については何も書かれていなくて、それどころか挨拶すらもなくて…。

嫌がられてるのかな…。そう思った。高瀬君は私とメールするの

が面倒なのかな…って。それと同時に、怒りに似た気持ちも込み上げて来た。だって、いくらなんでも文章が短すぎる。もし嫌なら嫌って、そう言えればいいのに…！

そんな風に思ったら、今日高瀬君に会いに行く事がどうしても言えなくなつた。だってもし言つたら拒絶されてしまふかもしれないし、拒絶されないにしても返つて来るのがこんな素っ気ないメールだとしたら、そんなの見たくない。

行かない方がいいんじゃないかとも考えた。でも一目だけでもいいから、高瀬君の姿を見たかった。行く事は言つてないから会えるかどうかも分からないけど、それでもどうしても会いたくて、私は複雑な気持ちを抱えたまま電車で揺られた。

駅に着いて明日香と一緒に電車から降りると、見た事のない風景が広がっていた。その風景を見た途端、心の中を不安が襲つた。

「どうする？とりあえず学校行つてみる？」

「うん…。そうだね。」

明日香の言葉に頷いて、見知らぬ場所へと足を進める。

高瀬君が通う付属高校は、駅から少し離れた場所にある。歩いてもなんとか行かれる距離だけど、それだと時間が掛かるし、迷う可能性もある。

そう思つて、私は昨日お兄ちゃんのパソコンで、付属への行き方を検索した。どう行けば迷わずに済むのか探していたら、付属行きのバスがあるのを見つけた事が出来た。

駅のロータリーでバスに乗り込み、空いている椅子に腰を下ろす。恐らくいつもは混んでいるだろうそのバスは、日曜日の昼過ぎというのもあり、比較的空いていた。乗っているのは年配の人がほとんどで、学生らしい人の姿はない。

バスの中で私達はほとんど無言でいた。たまに言葉を交わしたけ

れど騒ぐ気にはなれず、ずっと窓の外を見ていた。私には見慣れない風景だけど、高瀬君にとってはもう見慣れた景色なのかな…。そんな事を思いながら。明日香は私の隣でバスの中をキョロキョロと見回したり、私と同じ様に窓の外を見たりと、なんだか落ち着かなそうにしていた。

途中から乗って来る人もほとんど居らず、駅から乗っていた人も次々に降りてしまったので、付属に着く頃にはバスの中には私達しか居なくなっていた。そのバスから降りて、ドキドキしながら付属の校門へと足を進める。

学校の中からは、日曜日だというのに大勢の人の声が聞こえて来た。きつとみんな部活をしに学校に来ているのだろう。その中には高瀬君の姿もあるだろうか…。

私服姿で知らない高校に足を踏み入れるのが躊躇われて、私達は塀に沿って付属の周りを歩く事にした。

私達を通う東高には、学校の敷地と道路の間にフェンスが張られている場所があつて、そこから校庭が見える様になっている。他の学校もそうかは分からないけれど、もしかしたら付属にもそういう場所があるんじゃないかと思つてそうする事にした。

少し歩くと、私達の期待通り、フェンスの張られた場所が見えて来た。そこから大勢の男女の声が聞こえてくる。

きつとあそこから校庭が見える。そしてそこには高瀬君の姿があるんだ！そう思つたら、何故か足が動かなくなった。会いたいと思つているのに、緊張して足が進んで行かない。

「どうしたの？」

そんな私を、明日香が不思議そうに見つめる。

「何か、緊張しちゃって…。」

「ここまで来て何言つてるの？ほら、沙和、行くよ。」

そう言つと、明日香は私の手を引っ張って歩き始めた。

その場所に着くまで、私は顔を上げられなかった。高瀬君の姿を

見たいのに、気付かれたらどうしようと怖かった。

高瀬君は、私を見たらどんな顔をするんだろっ…。嬉しそうにする？嫌そうにする？メールの文章を見る限りでは、高瀬君は私を嫌がっている可能性がある。そうなると思えば嫌な顔をされてしまう訳だけど、もしそんな顔をされたら、私はどうすればいいんだろっ…。

「大丈夫だよ。」

まるで私の考えが分かったかのように、明日香が私に声を掛けた。

「いつでも会いに来ていいって、高瀬君言ってたんでしょ？だから自信持ちなよ。」

自信…。そんなの持っていないのかな…。確かに私は高瀬君に『いつでも会いに来ればいいよ』と言われた。その言葉を信じていいの？

「沙和がそんな顔してたら、高瀬君だって困っちゃうよ。だから、ほら、笑って。」

「うん…。」

笑えと言われても直ぐには笑えなかった。でも明日香が言ったように、私の所為で高瀬君を困らせるのは嫌だ。だから…。もし高瀬君と目が合ったら、その時はちゃんと笑顔を作ろう。

「…あれ?!」

フェンスの前に着いた時、明日香が驚きにも似た疑問の声を出した。その声に反応して顔を上げると、明日香が慌てた様子を私を見て「沙和！野球部いないよ!」と言った。

「え…?」

まさかと思い、私はフェンスに駆け寄って中を覗いた。そこからは私達が思った通りに、校庭が見えた。でもそこにいるのはサッカー部とかソフトボール部とかいった人達の姿だけで、野球部員らしき人の姿は見つけられない。

「ねえ、本当に高瀬君、今日部活なの?」

「うん…その筈だけど…。」

私は必死で記憶を辿った。昨日来たメールには、確かに部活とい

う文字があった。じゃあ何で今、ここに野球部の姿がないのだろう…？

「午前中だけだったとか？」

そうなのだろうか…。あのメールには書いてなかったけれど、明日香が言う様に…。

「…ううん、違うと思う。前に高瀬君メールで“夕方まで部活やっていた”って言うってたもん。だからきつと今日も…。」

「じゃあ何で居ないの？」

何で…だろう。本当に何で居ないんだろう…。もしかしたら付属には校庭が二つあって、そのもう一つの校庭で練習しているとか…。

「あっ！」

その時、私は前に高瀬君から送られてきたメールを思い出して、慌てて携帯電話を取り出した。そしてその文章を確認すると、携帯電話の画面を明日香に向けた。

「付属の野球部って、たまに市営のグラウンドを借りて練習してるって…。だからそこに居るかも…。」

でも、市営グラウンドって何処にあるんだろう。そこまではこのメールには書かれていない。昨日の内に分かっていたら調べた事もあるに、どうしていままで思い出さなかったんだろう…。

「市営グラウンドって、一つ向こうのバス停の？」

「え？」

明日香の言葉に、私は驚いて顔を上げた。

「明日香何で…そんな事知ってるの？」

「さっきバスの中に路線図貼ってあったじゃん。そこに載ってたよ。」

そういえば明日香、バスの中であちこちキョロキョロと見ていたっけ…。私は気付かなかったけど、明日香はその時路線図を見つけて、そして次の停留所の名前まで覚えてくれてたんだ…！

「本当にそこなのかは分からないけど、とりあえず行ってみる？」

「うん。」

明日香の言葉に大きく頷いて、私達は停留所に向かって足を進めた。

恋人の基準値「後編」

停留所一つ分の距離なら迷わないよねと、私達は付属の停留所からそのまま道に沿って、次の停留所を目指した。そして次の停留所に着く手前の交差点に“市営グラウンド”という看板を見つけ、その案内に従ってわき道へと進んだ。

そこから少し歩いた場所に大きな駐車場を発見して、敷地内に入り辺りを見回すと、脇にある駐輪場に自転車が沢山停まっているのが目に入った。

ここで…いいのかな？

明日香と私は顔を見合わせて、そのまま土が固められた通路へと入った。

外からも見えた高い塀で囲われた場所。あれがきつと野球グラウンドなんだろう。そこに近付くにつれて治まっていた緊張がぶり返ってきて、そして不思議と歩く速度が速くなる。あの場所に、

高瀬君はいるのだろうか…。早く確認したい。

暫く歩くと、前方にフェンスが張られた場所を発見した。あそこからなら、きつと中の様子が伺える。半ば小走りにフェンスに近付き中を覗こうとした時

「沙和、見て。」

と、明日香が私の腕を引っ張った。それに促されて明日香の見ている方向に目を向けると、私達が居る場所より少し離れた所から、野球のユニフォームを着た男子が数人出て来た。

彼らは何やら楽しそうに笑いながら、近くにある水飲み場へと向かった。そしてその後を追いかける様に、続々とユニフォーム姿の男子が歩いて行く。短い髪がいかに高校球児らしい。あの中に高瀬君はいるのだろうか…。

私と明日香はフェンスの前から離れることなく、少し離れた場所にいるその団体をじっと見つめた。水道に群がる人の中に高瀬君ら

しき姿は見当たらない。あれって本当に付属の野球部なのかな…。
「もう少し近くに行ってみようか。」

明日香の言葉に

「うん。」

と頷き、私達は並んでいる木の陰に隠れながら、少しずつ足を進めた。そして彼らから五メートル位離れた場所まで近づくと、私は心臓をどくんつと跳ね上がらせて、そこで足を止めた。

水道に向かう男子の胸元に“付属”の文字。間違えてなかった。ここが高瀬君のメールに書いてあった市営グラウンドだったんだ。高瀬君はここにいるんだ…！

「良かったじゃん沙和！やっぱりここだったんだよ。」

明日香も同じ様に“付属”の文字を見つけたらしく、私の隣で嬉しそうにはしゃいでいる。

「でも高瀬君いないね。」

「うん…。みんな出て来てるって事は、練習終わったのかな…？」

「違うんじゃない？だって手ぶらだし。終わったのなら荷物とか持ってる筈でしょ。」

「そっか…。そうだね。じゃあ休み時間かな…。」

練習が終わった訳ではないのなら、高瀬君がここ来る確率は百パーセントではない。もしかしたら球場の中で休んでいる可能性もある。ここで待つかさつきいたフェンスの前に戻るか、一体どっちにすればいいのだろうか…。

「沙和！」

後ろを振り返っていた私の腕を、明日香が再びぎゅっと掴んだ。びっくりして前に向き直り

「何？どうしたの…。」

と途中まで言い掛けた時、明日香が私の言葉を遮り

「ねえちよつと！あれ、高瀬君だよな？！」

と、私にびつたりとくっついて興奮ぎみに言った。

「え…？！」

どこ…?!

心臓をドキドキさせながら、明日香の視線を慌てて辿る。

明日香が見ているのは水飲み場ではなく、球場の出入り口付近。さつきに比べて随分と人通りが少なくなつた場所。

そこには汚れたユニフォームを着た数人の男子の姿があつた。その中の一人 あれは間違いなく高瀬君だ…!

最後に会つてからまだ一ヶ月ちよつとしか経っていないのに、まるで物凄く久しぶりに会つたみたいに思えた。嬉しくて切なくて、心臓が掴まれた様にぎゅつとなつて、声が出せなかつた。あの時よりも少し背が伸びた? 帽子かぶつてて良くは見えないけど、髪の毛短くなつたよね…?

「高瀬君!」

隣にいた明日香が、いきなり大きな声で高瀬君の名前を呼んだ。

「え…?!ちよつと、明日香!」

突然の明日香の行動に慌てふためき、明日香の腕をぎゅつと掴み返す。

自分の名前を聞いた高瀬君が、ゆつくりとこちらに視線を向けた。最初訝しげにしていたその目が、私達の姿を見つけた途端、大きく見開かれる。

「あ……。」

私達に、気付いたんだ…。それは分かつたけれど、私は何も言えなかつた。色々な思いが頭の中を廻つて、何を言つていいか分からない。

高瀬君と一緒にいた男子にぺこりと頭を下げると、私達の近くに駆け寄つて来た。そして私達の前で止まり私を見ると

「連絡、してくれればよかつたのに…。」
と言つた。

「う…うん。ごめんね。突然来て。」

暑くもないのに、汗が滲んだ。緊張している所為だろうか…。

高瀬君に最後にメールを送ったあの日、本当は彼に今日ここに来る事を伝えたかった。でもどうしても出来なかった。

だって怖かったから。拒否されたらどうしようって思ったから。それと同時に、びっくりさせたいっていう気持ちもあった。私達が突然来たら、もしかして高瀬君、喜んでくれるんじゃないかって。

今の彼の表情からは、その気持ちを知る事は出来ない。

…ねえ、今、何を考えてるの？迷惑だって思ってる？それとも…。

「おい、高瀬ー！」

遠くから、高瀬君を呼ぶ声が聞こえた。ううん、実際はそんなに遠い距離ではないんだけど、私には遠くからの声に聞こえた。

高瀬君がその声に反応して後ろを振り返る。それと同時に、私も高瀬君を呼んだ男子に視線を向けた。

未だに出入り口付近にいるその数人の男子は、私達の方をちらちら見てこそそと話していた。そのうちの一人が笑いながらこちらに顔を向け、そして

「高瀬の彼女ー？」

と、大きな声で訊いた。

そんな事、どうしてそんな大きな声で訊くの？！周りにいる人も聞こえちゃうよ！…でも、高瀬君は何て答えるんだろう。その答えが知りたい…。

その後の高瀬君の言葉を聞いて、私の体は動かなくなった。そして一瞬、何にも考えられなくなった。

高瀬君は恥ずかしそうに、でもはっきりとした声で彼に向かって言った。

「やめてください！そんなんじゃないっす。」

「沙和…。」

私を心配する様な、明日香の小さな声が聞こえた。でも私は、その声に反応する事が出来なかった。

…そんなんじゃない。

やっぱりそうだったんだ。高瀬君は私の事、何とも思ってたのじゃない。

悲しかった。そして勝手に期待していた自分が恥ずかしくて、悔しかった。それと同時に、怒りに似た気持ちが込み上げて来た。

私は確かに高瀬君に自分の気持ちを伝えていない。それは本当の事だ。でも彼の前では自分の気持ちに素直になって行動していた筈だ。だから“連絡していい？”って聞いたし、“会いに行く”って言った。明日香にも瑞穂にもそして同じクラスにいた女子にも、私の気持ちはバレバレだった。なのに何で、高瀬君は気付いてくれないの…？

我が儘なのかもしれない。自分の気持ちを伝えていないのに気付いて欲しいなんて、そんなの身勝手かもしれない。でもアルバイトしてお金を貯めてここまで会いに来た私に、“そんなんじゃない”は酷いよ…！

「…私じゃ駄目なの…？」

自分の意志とは関係無く、そんな言葉が口から出た。

「え…？」

それに反応して、高瀬君と明日香が私を見る。

自分でも何を言っているんだろうと思った。でもどうしても止められなかった。今まで蓄積されてきた想いが、次々と溢れ出す。

私は俯けていた顔を上げた。そして睨む様に真っ直ぐ高瀬君を見て、言った。

「私じゃ駄目なの？私じゃ高瀬君の彼女になれないの？」

「ちょっと来て。」

暫く呆然と私を見ていた高瀬君が、そう言って歩き出した。その後を、私が黙って着いていく。

歩いている間に頭が少し冷静になった。そしたら、さっき自分が言った事が急に恥ずかしくなってきた。

私、何であんな事言ったの?! いくら勢いとはいえ…。でも言っ
てしまったなら、もう後には引けない。もう一度自分の気持ちを高
瀬君に言っ、そして高瀬君の気持ちを聞こう。

野球部員から離れた木の陰で、高瀬君が立ち止まった。そして私
をその前に誘導する。

されるがままに高瀬君の前に立ち、私は高瀬君を見上げた。

…やっぱり少し背が高くなった。いや、そんな事はどうでもいい
んだ。今は他に言わなければいけない言葉があるんだから。

「私、高瀬君が好き。中学の頃からずっと…。」

高瀬君は真っ直ぐ私を見つめている。ちゃんと私の言葉を聞いて
くれてるんだ…。

「高瀬君は、私の事どう思ってるの…? 私じゃ、高瀬君の彼女にな
れないかな…。」

私の問いかけを聞いた彼が、左手を耳の後ろに当てた。困った様
な顔してする、中学の頃からの高瀬君の癖。それは今でも変わって
ないんだ。

「あのさ…。」

暫く黙っていた高瀬君が、困った様な顔をしたまま口を開いた。

「あのさ…、俺達学校離れてるし、部活やってるからあんまり会え
ないけど…、それでもいいって思ってるの?」

「思ってるよ。そんな関係ないもん。」

高瀬君の言葉に、私は迷いもなく頷いた。確かに住む場所は離れ

てるし、あまり会えないかもしれない。でも心の距離は少しでも近くにあってほしい。

「それに俺、メールとか電話とか苦手だし、連絡とかあまりしないし。」

「それは……。それでもいい。だって高瀬君が好きなんだもん。高瀬君の特別になりたいの。」

私の言葉を聞くと、高瀬君は再び黙り込んだ。でも私を見る目はさっきまでと違う。ひたすら真っ直ぐで真剣な瞳。

ふと高瀬君が目を閉じた。そして

「俺も……。」

と何か言い掛けた。でもその後の言葉は中々出てこなくて、そして目を開いた高瀬君は私から目を逸らして、また困った様な表情をしながらふつと私の前から離れた。

え……？何を言い掛けたの？そして何で私から離れて行っちゃうの……？高瀬君の返事は“YES”なのか“NO”なのか、それを聞かないきゃ帰れないよ……！

高瀬君の後を私は慌てて追い掛けた。でも高瀬君はすたすたと凄まじい早さで歩いて行って、私はそれに追い付けなかった。

彼が向かったのは、野球部員が集まる水飲み場。そこで高瀬君はさっき“高瀬の彼女？”と訊いた人に近寄ると

「先輩。」

と、その人に声を掛けた。

水を飲んでいたその人が、顔を上げて高瀬君を見る。すると高瀬君は

「すみません。」

と頭を大きく下げて、それから彼を真っ直ぐに見て言った。

「俺、嘔吐きました。今一緒にいたの、俺の彼女です。」

先輩と声を掛けられたその人が、呆然と高瀬君を見ている。そして私も。ただ呆然と二人の姿を見つめた。

…今、高瀬君、何て言ったの……？ “彼女です” って、それって誰の事…？

「沙和ー！」

少し離れた場所で私達を見守っていた明日香が、私に駆け寄った。そして

「よかつたね！！」

と、私に抱きついた。

「ねえ、明日香…。」

私はまだ呆然としたままで、ゆっくりと明日香に尋ねた。

「今、高瀬君が言ったのって…誰の事？」

「誰って、沙和に決まってるじゃん！沙和、高瀬君の彼女だよ！」
信じられなかった。まるで夢の様だった。

直接じゃなかったけど、今高瀬君、私の事“彼女”って言うてくれたんだよね…？私、高瀬君の彼女になっていいんだよね…？

それを確かめる様に、私は再び高瀬君に目を向けた。するとそこには

「お前、惚気に来たのかよ?!」

と言われながら、もみくちやにされている高瀬君の姿があった。周りの人の高瀬君に向かう手が少し強い様な気がするけど、笑ってるって事は痛くないのかな？

みんなに囲まれながら、高瀬君がふと私を見た。そしてはにかんだ表情を私に向けた。

~
E
N
D
~

恋人の基準値「後編」(後書き)

番外編『恋人の基準値』を読んで頂き、ありがとうございます。こちらではもう一話、高瀬君と沙和が無事恋人になった後のお話を掲載したいと思います。もう暫らくお付き合いくださいませ。

花火「第一話」(前書き)

高瀬視点のお話です。

花火「第一話」

「苗字で呼ばれるの、嫌だな。」

電話のから山口さんの声が聞こえる。

「みんな私の事“沙和”って呼んでるんだし、高瀬君も沙和でいいよ。」

「え…。」

「苗字って何か他人行儀でしょ。その…私達付き合ってるんだから、高瀬君にも名前で呼んでほしいな。」

「じゃあ…沙和…ちゃん？」

「“ちゃん”いらさない。呼び捨てで。」

「そう言っけど…、じゃあ山口さんは俺の事“祥太”って呼べる？」

「“山口さん”じゃなくて“沙和”だつてば！…いいよ。私も名前前で呼ぶ。えっと…祥太君。」

「“君”はいらさないよ。」

「無理！だつて恥ずかしいもん。だから“祥太君”でいいでしょ？
決まりね！私は“祥太君”。えっと…祥太君は“沙和”って呼ぶの。
今日からだよ。」

付き合い初めて数ヶ月。最近の彼女は少しだけ我が儘だ。でもそれは“連絡ないと寂しいから、もう少しだけメール増やして”といった様な、可愛い我が儘なのだけれど。

でも今回は流石に困った。今まで苗字で呼んでた人をいきなり名前　しかも呼び捨てにするなんて、俺だつて恥ずかしい。それでも言う事を聞いてしまうのは、やっぱり彼女を好きだからなのだろう。

「じゃあ、たか…じゃなくて、祥太君、花火大会の事忘れないでね。」

「分かった。」

「でも…試合に勝つたら来れないんだよね…。あ、勿論勝つてほしいよ！勝つて甲子園に行つてほしい。うちの学校はすぐに負けちゃつたみたいだけど、付属は凄く強いもんね。だから絶対甲子園行けるよ！」

本当は一緒に行きたいと思つているだろうに、それを隠して俺の事を応援してくれる。そういう所、中学の頃から変わつてない。

「…あ、そろそろ寝ないといけないよね。明日も朝から練習だもんね。」

「まあ…。」

「じゃあ…祥太君、また電話するね。おやすみ。」

「おやすみ。」

恥ずかしがる様に名前を呼んだ彼女の声を耳に残しながら、俺は電話を切って携帯電話を閉じた。

名前で呼ばれるのもいいかもしれない。何か特別な感じがして。家族以外の人から名前で呼ばれる事がほとんどない俺にしてみたらそれは尚更だ。何となくだけど、彼女の気持ちがあんなに分かった様な気がした。…次に連絡した時には、彼女を“沙和”と呼ばなきゃな。

それにしても、花火大会か…。彼女は一緒に行きたそうにしていたけど、俺にしてみたら複雑だ。

勿論行きたいという気持ちはある。最近は野球部の練習や試合やらで、彼女と会うどころか連絡すら少なくなっている…。でもその日は甲子園大会の真っ只中。まだ一年だし、レギュラーにもなれていないけど、行けるならばどんなかたちでもいいから行きたい。その為に野球が強い付属に入ったんだ。好きな子と離れてまで…。

「あれ、高瀬？こんな所で何やってるんだ？」

後ろから名前を呼ばれ、俺は声のした方に振り向いた。そこにいたのは野球部の一つ上の先輩。誰にも見られなくなかったから、こんな廊下の隅にいたのに。先輩こそここで何やってるんだ。

「あ、もしかして彼女と電話か？そうだよな、部屋じゃできねえもんな。」

「はあ…。」
「相部屋は大変だな。」

先輩の言った通りだ。部屋じゃ電話できなかったから、俺は廊下に出て来たのだ。

寮に入っている俺の部屋は、同じ学年の奴と一緒に使っている相部屋。そんな場所で電話をしたら、嫌でもそいつに会話を聞かれてしまう。そんなのどう考えても耐えられない。

「彼女…沙和ちゃんだっけ？可愛いもんな。そりゃあ心配で電話もする訳だわ。でも明日も朝から練習なんだから、早く寝ろよ。」

先輩だっけ起きてるくせに…とは、絶対に言えなかった。入部し

てまだ数ヶ月の俺にしてみたら、先輩の存在は絶対だ。そんな人に口答えなんて出来る筈がない。

「はい。おやすみなさい。」

そう言っ頭を下げると、俺は駆け足で部屋に向かった。

その夏の県大会準決勝。相手はうちの高校と同じで甲子園への出場経験がある、強豪の南ヶ丘高校。

その日はやたらと暑かった。そして連日の試合と練習の所為でみんな疲れていた。でもそれは相手だって同じ筈だ。だから絶対に負ける訳がない。

それに今日のスタメンピッチャーは、エースの平野先輩。今まで何人もの選手から三振を打ち取った、凄い球の持ち主なのだから。

試合は序盤、付属優勢で進んだ。平野先輩のピッチングは勿論の事、他の先輩の勢いも凄くて、俺達の高校はあつという間に二点を先制した。

この調子なら絶対勝てる。そして次の決勝も勝って、きっと甲子園に行けるんだ……！誰もがそう信じていた。

でも終盤、平野先輩に疲れが見えてきた。炎天下の中でずっと投げっぱなしだったから無理もないかもしれないけれど、連続してフォアボールを取られる様になった。

監督は悩んだ末、控えの西村先輩をマウンドに上げた。でも西村先輩の調子はあまり良くなって、最終回表、ランナー二、三塁という場面で、相手のバッターにホームランを打たれてしまった。その裏、付属は点を取る事が出来ず……。

結局二対三という結果で、付属の決勝進出は成らなかった。

県大会が終わった野球部の夏休みの練習は、自由参加となった。最初の頃はほとんど全員練習に参加していたけれど、お盆が近づくとつれて実家に帰る人も増え、練習参加者も少なくなってきたので、俺もみんなに便乗して数日間練習を休み、実家に帰る事にした。

今日は以前彼女が言っていた花火大会の当日。昨夜の電話で彼女は「みんなと待ち合わせする前に、二人だけで遊ぼう。」と、楽しそうに言っていた。

でも俺は迷っていた。テレビの前で考え込んだ。彼女の言う事を聞いてあげたい、その気持ちは勿論ある。でも今日は、甲子園に行った南ヶ丘の試合の日だ。一体南ヶ丘がどんな試合をするのか、どうしてもリアルタイムで見たい。

悩んだ末、俺は携帯電話を手にして通話ボタンを押した。電話の相手は勿論彼女だ。承諾してくれるかは分からないけれど、とりあえず頼むだけ頼んでみる事にした。

「あ、沙和？悪いんだけど…俺の家に来てもらってもいい？途中まで迎えに行くから…」

花火「第二話」

彼女の家から俺の家までは、結構距離がある。歩いて来れない程ではないけど、それだとかかなり時間が掛かるだろう。だから俺は自転車に乗って、中学校がある辺りまで彼女を迎えに行こうと思っていた。でも彼女はバスで来ると言い張るので、それなら…と、家の最寄りのバス停まで彼女を迎えに行く事にした。

夏の昼間の太陽が、ジリジリとアスファルトを照らしていた。上からも下からも熱気が来て、ほんの少し外にいただけでも汗が流れ落ちる。自転車で中学からの距離を走るなんて、それこそ熱射病にでもなってしまうそうだ。彼女がバスで来ると言ったのは、正解だったかもしれない。

メールで指定された時間にバス停に行くと、彼女は既にそこに立っていた。花火大会の為に用意したのか、薄いピンクの浴衣を着て暑さの中、彼女のいる場所だけが涼しげに見えて、俺は暫く目を奪われた。

「祥太君！」

俺に気付いた彼女が小さく手を振る。それを見て、俺は慌てて彼女に駆け寄った。

「ごめん、待った？」

「ううん、大丈夫。今来た所。」

「そっか。じゃあ暑いし、早く家に行こう。途中で飲み物でも買って。」

そう言っただけ俺は歩き出そうとしたけれど、何故か彼女はそこから動かなかった。戸惑った様な顔をして、上目遣いに俺を見ている。

「…どうしたの？」

「あの…祥太君、私本当に祥太君の家に行っているの？」

彼女が何を言っているのか分からなかった。だって家に来てと頼んだのは俺の方なのに。何を躊躇っているんだろう。

「あの…だつて、お家の人とか、いるでしょう?」

ああそうか、彼女は俺の家族と会う事に、躊躇いを感じているんだ。そうだよな。俺だつてもし彼女の家族に会うとなつたら、かなり躊躇するかも…。

「大丈夫だよ。今家、誰もいないから。」

俺はそう言つと、彼女の手を引いて歩き出した。

「おじゃまします…。」

誰もいないと言つたにも関わらず、彼女は緊張した面持ちで家に足を踏み入れた。そんな彼女が可愛くて思わずにやけそうになつたけれど、彼女にそんな顔を見られたくなくて、俺は

「どうぞ。」

と言つて、足早に自分の部屋に向かった。

「ここが祥太君の部屋なんだ。」

物珍しそうに、彼女がキョロキョロと辺りを見回す。そういえば、ここに彼女が来るのは初めてだつた。

「凄いな。部屋にテレビがあるんだ。いいなあ。私も自分の部屋にテレビ欲しいな。」

「まあ…。小さいけど。」

姉ちゃんと妹の亜希という女二人に挟まれて育つた俺には、昔から自分の好きな番組を見る権利が無かつた。それに我慢が出来なくて、父さんに頼み込んで買ってもらつたのが、この小さいテレビ。

俺がこの家から居なくなつたら、いつの間にか姉ちゃんの部屋に持つていかれていたら、さっき彼女が来る前に自分の部屋に戻しておいた。

「じゃあ俺野球見るけど…、一緒に見る?」

ここに来る途中で理由を話しておいた俺は、テレビの前に座り彼女を見た。しかし彼女は

「ううん、いい。」

と言つて、小さく首を振つた。

そう言われるだろう事は、なんとなく予想していた。彼女は中学の頃からたまに野球部の練習を見に来ていたけれど、野球のルールには全くと言っていい程無知だった。それはきつと、野球というスポーツに興味がないからだろう。

「ごめんね…。」

彼女が申し訳無さそうに謝る。

「別に…。無理言ったの、俺の方だし。じゃあ悪いけど、その辺の漫画でも適当に見てて。」

そう言つと俺はテレビを付けて、試合に没頭し始めた。

南ヶ丘の対戦相手は、甲子園常連のＴ工業だった。最初は南ヶ丘がどんな試合をするのか気になっていたけれど、次第に相手のプレイに興味を奪われていく。Ｔ工業は攻撃だけでなく、守備も滅茶苦茶上手かった。本当に同じ高校生なのかと圧倒される。

俺なんて、まだまだだな…。今までの倍以上練習しないと、きつとこいつらには追い付けない。学校に帰ったら、毎日ひたすら練習しよう。そして今年は無理でも来年にはレギュラーになって、そして絶対にこの舞台に立とう…！！

その試合は六対一という結果で、Ｔ工業の圧勝だった。試合を見終わつた俺は大きなため息を吐いて、そのまま時計に視線を向けた。時計は四時過ぎを指している。テレビを見始めてから一時間半以上が経過していた。花火大会まであと少し…か。そろそろ出掛けないといけないな。

そこで俺ははつと気が付き、慌てて後ろに振り返つた。そういえば彼女を待たせたままだった。試合に夢中になって話すこともせず…。もしかしたら彼女を怒らせてしまっているのではないだろうか。

後ろに振り返って彼女の名前を呼ぼうとした俺は、彼女の姿を見た途端、開きかけた口を閉じた。

彼女は部屋の隅で、体育座りをしながら真剣な顔で漫画を読んでいた。その姿がまるで小動物みたいで可愛くて、見るだけで顔が綻んでくる。

でも可愛らしいその姿の中で、髪の毛を上げたうなじだけが妙に色っぽかった。それは高校生になった彼女が、少しずつ女性へと近づいている証拠なのだろうか…。今までそんな風には彼女を見た事はなかったので、思わずドキリとする。

触れてみたい。

そう思った。まだ俺が触れた事のない、柔らかそうな彼女の部分に。

しかしこの状況で彼女に触れたら、一体どうなるのだろう。俺達以外に誰もいない、この家の中で。一度触れたら止まらなくなるかもしれない。更に別の部分にも触れなくなるかもしれない。

このまま彼女を見ていたら変な気を起こしそうで、俺は慌てて彼女から視線を逸らした。

冷静を保とうと、大きく息を吸う。それでも彼女に触れたいという欲求は、どんどんと加速してくる。

とりあえず、落ち着かなければ。彼女を恐がらせる様な事をする前に。この可愛らしい彼女に嫌われる様な事だけは、絶対にしちやいけない。でも…。

キス位なら、いいだろうか。

俺達が付き合ってもうすぐ三ヶ月になるんだ。それ位なら彼女も許してくれるかもしれない。

俺は逸らしていた視線を戻すと、ゆっくりと彼女に近付いた。そして彼女の前に行き

「沙和…。」
と彼女の名前を呼んだ。

俺の声に反応して、彼女がゆっくりと顔を上げる。そのふっくらとしたピンク色の唇に、俺の視線は奪われる。

止める事が、出来なかった。

俺は何も言わず彼女に顔を近付けて、そして 唇を重ねた。

花火「第三話」

唇を離れた俺は、彼女から視線を逸らした。照れくさいというのもあったけれど、勢いでしてしまった俺の行動に、彼女がどんな反応を示すのか怖かった。

でも彼女は何も言わなかった。それどころかまるで時間が止まった様に、動く事さえもしなかった。

恐る恐る彼女を見ると、そこには呆然と俺を見つめる彼女の瞳があった。その目からは、とてもじゃないけど、感情を読み取る事は出来ない。

「あの…さ。」

俺は心臓を大きく鼓動させながら、彼女に声を掛けた。その声に反応して、漸く彼女の表情が変わる。

「あの…嫌だった？」

俺の問い掛けに、彼女がブンブンと首を振る。そして

「えっと、突然で…、何が起きたか、良く分からなくて…。」
と、赤い顔で俯いた。

俺達が初めて交わしたキス。それを“良く分からなかった”なんて。まあ、何も言わずにした俺も悪いかもしれないけれど…。

出来たら覚えていてほしい。忘れないでいてほしい。これから何度となくするかもしれない行為だけど、やっぱり“初めて”は特別だから。

「じゃあさ、もう一回…していい？」

相変わらず心臓をバクバクさせながら、俺はそう言って彼女を見た。

「そうすれば、今度は分かるでしょ。」

俺の言葉に、彼女は驚いた様に顔を上げた。そして躊躇いの目で暫く俺を見つめ、それから

「うん。」
と小さく頷いた。

さつきは勢いでしたから分からなかったけれど、改めてするとこんな緊張するものなのか…。しかし“もう一度する”と言った手前、止める訳にもいかない。

俺は大きく息を吸って、彼女へと顔を近付けた。

ぎゅっと目を瞑る彼女につられ俺も目を瞑り、再び彼女の唇にそっと触れる。するとその柔らかさが唇から伝わってきて、俺自身も最初のキスを覚えていなかった事に気が付いた。

手をつなぐのとは違う感触や温もり、そして好きな子とだからこそ得られるのであるう緊張感と幸福感。

決して誰とでも出来る行為ではない。お互いがお互いを“特別”と思うからこそする行為。

ああ俺達、本当に付き合ってるんだな　と、改めて思った。俺は彼女が好きで、彼女も俺を好きでいてくれているんだな、と。

一度目よりも少し長いキスを交わして、俺は彼女から唇を離れた。今までしたことなかった行為に興奮しているのか、妙に息苦しい。そんな俺を、彼女は恥ずかしそうに見上げた。見たことのない潤んだ瞳で。

ヤバイ。咄嗟にそう思った。そんな目で見られたら、理性が保てなくなる。

それでも必死に我慢しよう、俺はぎゅっと手を握り締めた。でも視線は彼女から逸らす事が出来ない。

もしこれ以上の行為をしたら、彼女はどんな反応をするだろうか。嫌がるだろうか、それとも…。

彼女が何処まで受け入れてくれるか知りたくなった。いやそれ以前に、俺がもっと彼女に触れたかったのだけれど。もしも嫌がられ

てしまったら　その時は、そこで止めればいいだけの事だ。
俺は握り締めていた手を開いて、彼女に向かって伸ばした。

「祥太！」

突然部屋のドアが開かれて、俺は伸ばしかけていた手を引っ込めた。そして慌てて彼女から離れると、心臓をバクバクさせながら、声がした方に顔を向けた。

そこにいたのは、今日は友達と遊びに行くと言っていた姉ちゃんだった。確かに昼頃家を出た筈なのに、どうして…！

「何でいるんだよ！」

俺は必死で焦りを隠しながら、部屋の前に立つ姉ちゃんに向かって叫んだ。すると姉ちゃんは

「何でって、自分の家だし。ていうか、あんた何怒ってるの？」

と言って、俺に近付こうとした。

「入って来んなよ！」

慌ててそう言ったけれど間に合わず、姉ちゃんは部屋に足を踏み入れて、そして隅にいる彼女を発見した。

「あれ、誰か来てたんだ。…もしかして、祥太の彼女？」

「あ、初めまして。山口沙和です！」

視線を送られた彼女は慌てて立ち上がると、姉ちゃんに向かってペコリと頭を下げた。…こんな奴に挨拶なんかしないでいいのに。

「どーも。祥太の姉の浩美です。」

姉ちゃんは彼女に挨拶を返すと

「ふうん。」

と言って、意味深な目付きで俺と彼女を交互に見た。その視線に耐え切れず

「何の用だよ！」

と睨み付けると、姉ちゃんは何気ない顔で

「ああ、お母さんは？」

と俺に尋ねた。

「亜希連れて買い物行ったっ！用が済んだなら出てけよ！」

「はいはい。分かったよ。」

吐き捨てる様な俺の言葉を聞いて、姉ちゃんが仕方なさそうに返事をした。これで漸く邪魔者から解放される…。そう思って、俺はほっと息を吐いた。

しかし姉ちゃんは部屋から出て行かなかった。それどころか、部屋の隅へと足を進めている。

「何してんだよ！早く出てけよ！」

焦る俺を無視して姉ちゃんは彼女の前に行き、彼女の耳元に顔を近付けた。そしてちらつと俺を見ると、わざと聞こえる様な声で

「祥太に悪い事されないように気を付けてね。」

と、ニヤニヤしながら言った。

頭がカアツと熱くなった。血が逆流したのかと思った。それと同時に、物凄い羞恥が俺を襲った。

さっき俺が彼女にしようとしていた事、バレバレだったのか？！それとも、ただからかっているだけなのか？

どちらにしても、もうここには居たくなかった。これ以上余計な事を言われる前に、早くここから去りたい…！

「沙和、行くよ！」

俺はなるべく顔を見られないようにして、彼女に声を掛けた。

「早くしないと待ち合わせに遅れるだろっ！」

「え…、うん。」

彼女が戸惑いながら、俺と姉ちゃんを交互に見ているのが分かった。でも俺は決して振り向く事はせず、さっさと部屋を後にして、玄関のドアを開けた。

いつも以上の早足で、俺は道路を歩いた。一刻も早く家から離れたかった。いや家からというより、むしろ姉ちゃんから離れたかった。

夕方に近付いた外の空気には、昼間程の暑さはなかった。でもじめじめとした心地の悪い蒸し暑さが、俺をイライラとさせる。

勿論イライラしている原因はそれだけじゃない。さっき家で起きた事、それが一番の原因だ。

「祥太君、待つて…！」

後ろから俺を呼ぶ彼女の声が聞こえた。その声にはっと我に返り、慌てて足を止める。

ちらりと振り向いたその先には、必死に俺を追い掛ける彼女の姿があった。普段は着ない浴衣の所為で、歩きづらそうにしながら。

そういえば、一年前もそうだった。一年前に一緒に行った花火大会でも、彼女は歩きづらそうにしていた。俺はそれを知っているのに、氣遣ってやれないなんて…。

「ごめん…。」

漸く追い付いた彼女に、俺はぽつりと謝った。そんな俺を見上げて、彼女が

「もしかして…怒ってる？」

と不安そうに尋ねた。

「別に…。怒ってないよ。」

もし怒っているのだとしたら、彼女を氣遣ってやれなかった自分に対してだ。それと…欲求のままに彼女を手に入れようとした、自分自身に対して。

「良かった。」

俺の答えを聞いて、彼女が安堵の表情を浮かべた。その可愛らしい表情に罪悪感を覚えながら、俺は

「早くしないと、待ち合わせに間に合わないよ。」

と言って、彼女の手を握りゆっくりと歩き出した。

花火「最終話」

「沙和あ！」

少し離れた場所から、彼女を呼ぶ声が聞こえた。途端に俺は、彼女と繋いでいた手を離れた。

花火大会で混み出した町を歩きながら、俺達はずっと手を繋いでいた。すれ違った何人もの人達の中には、きつと俺達がそうしている事に気付いた人もいただろう。

そんな気恥ずかしい状況の中で手を離さなかったのは、周りにいたのが他人だったから。二度と会わないであろう…いや、もし会ったとしてもすれ違う位の赤の他人。そんな人達に俺達の姿を見られなくても、全く構いはしない。

でも、相手が知り合いとなると話は違う。手を繋いでる所なんて見られたら何を言われるか…考えただけでも恥ずかしい。

彼女は手が離れたのに気が付くと、自分の手をちらっと見て、それから何か言いたげな目をして俺を見上げた。でもすぐに

「沙和、こつち！」

という彼女を急かす声が聞こえたので、俺から視線を逸らして声の主に向かい駆け出した。

彼女の後をゆっくりと追いかけると、その先には彼女の親友の水野日香さんと、中学時代に俺と同じ野球部に入っていた田中の姿があった。

「高瀬君と一緒に来たんだ。」

水野さんが彼女に声を掛ける。

「仲いいね。」

そう言っただ俺を見た水野さんの目がさっきの姉ちゃん目と違って、俺はその視線から目を逸らした。

「何？二人って付き合ってるの？」

水野さんの隣で、田中が驚いた声を上げる。それを聞いた水野さんが

「ええ?! 田中知らなかったの?!」

と、更に大きな声を上げた。

「だって高瀬って、そういう話全然してくれねえもん。」

そうなんだ。俺はそういう話をするのが、滅茶苦茶苦手だ。他の奴の話なら黙って聞くけど、自分の話となると…。だってそういう話って照れ臭いし、そんなの本人が知っていればいいだけの事だ。だから今でもたまに連絡を取っている田中にさえ、俺達が付き合い始めた事は言ってなかった。

「…そっか。」

田中がため息混じりに、俺と彼女を交互に見ている。それには気付いてたけれど、俺は田中と目を合わせようとはしなかった。でも

「…やっぱりな。」

という田中の呟きに、俺は目だけを動かして田中を見た。

やっぱりなって、何だ? 田中は何を“やっぱり”と思ってるんだ?

「何? 何がやっぱりなの?」

水野さんも俺と同じ様な疑問を持ったらしく、キラキラした目で田中を見ている。水野さんの前にいる彼女も、不思議そうに田中を見ていた。

田中はそんな二人に視線を向けると

「だって高瀬って中学の時から、山口さんの事気にしてたじゃん。」
と言った。

それを聞いた俺は、弾かれる様に顔を田中に向けた。

気付いてたのか?! 一体いつから…?! そして一体今、何を話そうとしているんだ?

!

田中が何も言わない様にと、俺はじつと奴を睨み付けた。でもそれは

「えー?! 嘘! そうなの?」

と言う水野さんの好奇の目に負けてしまった様で、田中は俺を見る事もせず話を続けた。

「気付かなかった？…そうか、そうだよな。確かに高瀬って分かりづらいもんな。俺も初めは分かんなくて、逆に山口さんの事苦手なのかなって思ってたんだけど。でもよくよく見ると、素っ気ないくせに山口さんには優しいし、やたらと気にしてるし。だから多分嫌いなんじゃないくて、逆に山口さんを好きなんだって思った訳よ。…そういえば今思い出したけど、高瀬って明日香達が練習を見に来ると、何かちらちらと気にしてたよな？あれってやっぱり山口さんを見てた訳？」

田中の質問に、俺は答える事が出来なかった。それどころか、目を見る事さえ出来なかった。

その近くからも複数の視線を感じる。多分、彼女と水野さんの視線だろう。

…… 一体今日は何なんだ。姉ちゃんには行動を読まれるし、田中には過去をバラされるし…もう最悪だ！

だんだんムカついてきた俺は、ゆっくりと田中に近付くと、そのわき腹を拳で殴った。田中は

「いてーな！」

と大きな声を出したけど、そんなに強く殴ってないのに大袈裟なんだよ！

「何だよ！」

田中が睨む様に俺を見た。でも俺はその疑問に、直ぐには答えなかった。

彼女にカツコ悪い所を見せたくなかった。それに、俺はまだ彼女に“好き”という言葉伝えていないのに、それより先に言った田中の言葉が本当である事を悟られたくなかった。

だから俺は田中に体ごと近付いて、彼女に聞こえない位の小さな声で

「余計な事言うなっ。」

と告げた。

「あ、沙和、瑞穂だよ。」

水野さんが遠くに向かつて手を振りながら、彼女に声を掛けた。どうやらもう一人の親友の姿を見つけた様だ。

「ねえ、瑞穂の所行こう。」

そう誘われて、彼女は水野さんと共に小走りでその場を離れた。

俺はほっとため息を吐いた。これで彼女にカッコ悪い所を見せなくて済む…そう思った。

「なあ、」

彼女達が離れたのを確認した田中が

「で、どっちから告った訳？」

と俺に訊いてきた。

「…どっちだっていいだろ。」

そう俺は言ったけど

「もしかして高瀬から言ったの？」

という田中の言葉にムキになり

「俺じゃねえよ！」

と、思わず答えてしまった。

「ふうん、良かったな。…それにしても、高瀬ってそういう事全然話さねえし。」

「別にいいだろ。俺と沙和の事なんだから。」

「へえ、“沙和”って呼んでるんだ。俺も今度から山口さんの事“沙和”って呼ぼうかな。」

「何でだよ！」

「別にいいじゃん。みんな山口さんの事“沙和”って呼んでるんだし。」

「…止める。今まで“山口さん”って呼んでたんだから、これから

もそうしろよっ。」

「祥太君！」

俺を呼ぶ彼女の声が聞こえた。俺は田中から視線を逸らし、声のした方に目を向けた。

そこには手を振りながら

「早くしないと花火大会始まっちゃうよ。」

と必死になる彼女の姿があった。その姿が可愛くて思わずにやけそうになったけど、隣に田中がいるのであるべく冷静を装い

「ああ、今行く。」

と、彼女に返事をした。

田中がさっきの水野さんや姉ちゃんと同じ様な目をして、俺を見ている。ちょっとイラッとしたけど無視する事した。

俺は田中をその場に置いて足を進めると、彼女の元へと向かった。

～END～

花火「最終話」(後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございました！高瀬目線のお話、いかがでしたでしょうか。『恋人の基準値』は、この話で終了となります。でも…しつこい様ですが、もう一つ番外編を投稿しようかと考えています(汗;) 新しいお話は『二人だけの基準値』(予定)という題名で、R15指定となります。初めての年齢制限有りの作品なので、どんな話になるか私自身も分かりませんが、よろしければ読んでみてください(苦手な方はスルーしてください)

投稿開始は六月上旬を予定しております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8514g/>

恋人の基準値

2010年10月8日14時48分発行